

北原白秋「雉ぐるま」贅注

國*
生
雅
子

(一) はじめに

雉、雉、雉ぐるま、

お雉の背中に積むものは、

子雉、子々雉、孫の雉。

雉、雉、雉ぐるま、

お雉のくるまを曳くものは、

子鳩、子々鳩、孫の鳩。

九三四

雉、雉、雉ぐるま、

雉は子の雉、父恋し、

鳩は子の鳩、母恋し。

雉、雉、雉ぐるま、

雉はけんけん、鳩ぼつぼ、

啼いてお山を今朝越えた。

白秋童謡の出発点となった「雉ぐるま」（「赤い鳥」大7・7 『とんぼの眼玉』大正8・10収録）。ここにうたわれた「父恋し、母恋し」の主題に至りつく過程は既に幾つかの論文で考察を加えた。^(注)松下俊子との恋愛―結婚―離婚という一連の事件の中で自己肯定の根柢を喪失した白秋は、自己を親に対する子の位相に置き、偉大なる自然の前にひれ伏すことで芸術家としての聖性を回復した。その象徴が「父恋し、母恋し」と鳴く子雉子なのである。本稿はこの「雉ぐるま」をめぐるあれこれに、余計と言われれば余計な注釈を試みたものである。どんなに瑣末なことを詮

索しよう、真っ直ぐに掘り続けなければいつか中心にたどり着ける。ひとまずはそう信じて、考証の森に踏み入ることとしよう。

さて、「焼け野の雉子、夜の鶴」という諺にもあるように、雉子は親子愛の強い鳥とされ、雉子が父母を思つて鳴くという主題は、かつての日本人には判り易いものではあつたらう。しかし「雉ぐるま」そのものはさほど一般的とはいえない。従つて白秋は次のような注を付すこととした。

雉ぐるまの玩具は今でも筑後の清水寺の観世音で売つてゐます。この寺は行基菩薩といふ方の御開基です。

ほろろうつ山の雉子の声きけば父かと思ふ母かと思ふ。

行基

童謡「雉ぐるま」発表の前年、同じ主題が短歌として既にうたわれていた。その歌を歌集『雀の卵』（大正10・8）「雀の卵」〈雉子の尾〉「童のころ」に「柳河の玩具」の題を付して収録する際、やはり同趣旨の注が付けられることになる。

雉子ぐるま雉子は啼かねど日もすがら父母恋し雉子の尾ぐるま（初出大正6・6）

註 雉子ぐるまは筑後の清水山観音にて売る。この古刹は行基菩薩の開基にかかる。京の清水山はこの

わかれなり。この山の近きほとりに行基橋といふものあり。

『雀の卵』ではこの歌の直前に、「ててつぶつぶ弥惣次つけと啼く鳩のしろい鳩奴が薄紅の足（初出大正6・3）」という鳩笛を題材とした歌が置かれているが、童謡「雉ぐるま」に鳩が登場するのはこの歌との関連によるものである。更に遡れば『桐の花』（哀傷篇）の監獄生活を詠んだ作品に至りつくことになるが、その辺りの考察は別稿に任せることにする。また、後年、『雀の卵』増補として次のような歌も発表され、現在清水寺の歌碑にも刻まれている。

父恋し母恋してふ子の雉子は赤と青とに染められにけり（初出大正12・8）

だが、雉子車と清水寺の最も詳細な説明は「洗心雑話 その五」（『洗心雑話』大正10・7 初出大正7・2）「洗心雑話（四）」の一節ということになる。この奇妙な宗教的詩歌論の中で、白秋はまず清水寺開基にまつわる伝説を説く。中国から帰国の途にある行基は山の狭間から後光が射すのを認め雉子の鳴声を聞く。舟を捨て、雉子に導かれるように山中に分け入った聖は光を放つ合歓の木を発見し、その木を本尊として刻み伽藍を建立し清水寺としたという。多少なりとも行基の事跡を知る人は、はたして彼が中国を訪れた事実が伝えられているかどうか、不信に思ったのではなからうか。この問題は（三）で取り扱うこととして、白秋は童謡「雉ぐるま」の注として引いた歌をここ

でも紹介し、清水寺に伝わる郷土玩具、雉子車の説明を行う。更に次のような一節の後、自作の「雉子ぐるま雉子は啼かねど〜」の歌を披露する。

雉子ぐるまを思ふと小供の事が忍ばれる。昼は遊びにまぎれてもゐるが、日が暮れかかると急に父母の恋し
くなつた童の心が恋しくなる。雉子ぐるま、雉子ぐるま、私もあの頃がなつかしい。私は歌ふ。

こうして、父母を慕う子供的心を聖者が彼岸を慕う心と同質とする彼の童心論が展開されることになる。ところで、童謡の注で紹介された行基の歌であるが、「おこり小山の雉子」(『お話・日本の童謡』大正12・12 初出大正12・3)では、「ほろほると、啼く山鳥の、声聞けば、父かと思ふ。母かと思ふ。」とされているのだ。この文章は各地に伝わるわらべ歌を小学生向けにやさしく解説したもので、高野山で読まれたという芭蕉の「父母のしきりに恋し雉子の声」も引かれている。自作の童謡「雉ぐるま」は省かれているが、郷土玩具・雉子車は「雉子うま」という別称で紹介された。「ほろろうつ山の雉子の声きけば父かと思ふ母かと思ふ」と「ほろほると啼く山鳥の声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」。主題が示される下の句は同一だが、雉子と山鳥、はたしてどちらが正確な行基の歌なのか。これが本稿の出発点となった疑問である。が、その前に、雉子車とそれが伝えられる清水寺について確認しておこう。

(二) 郷土玩具・雉子車

九三八

九州一円に広く分布する雉子車、もしくはきじうまと称する郷土玩具に関しては、畑野栄三『きじうま聞書』(三一書房 平2・12)等を参照願いたい。ただし畑野も記すように、九州のみに限定されるものではなく、長野から群馬にかけても伝わっており、同書は主に九州に焦点を当てているが、全国規模での雉子車研究は未だ未着手の分野とあってよいだろう。例えば芥川龍之介は大正十三年八月十九日に軽井沢から室生犀星に書簡を送り、雉子車を玩具好きの岡本綺堂に送ることにしたと述べている。岩波版『芥川龍之介全集』第二十卷(平9・8)の注では雉子車を「九州地方の郷土玩具」としてあるが、場所から考えて群馬・長野県地方に分布していたものと考えられ、ちなみに群馬県立歴史博物館には彩色のない素朴な雉子車が収蔵されているとのことである。ともかくも九州には人吉系、珍珠・日田の北山田系、そして清水寺系の大別して三種の雉子車が伝わっており、それぞれフォルム、彩色、車輪の数等に特色を持っている。白秋は「濃い赤と青とで染めた、尾の長い、荒削りの赤松の材の玩具である。小さな車が前と後に四つついて、糸をつけて曳けばガラガラと走る」(「洗心雑話」と記しているが、これは清水寺の雉子車の特色であり、よく知られた人吉のものは二輪で彩色も赤・青(緑)・黄の三色である。福岡県山門郡瀬高町本吉にある清水寺に関して詳細は次項に譲るが、沖ノ端と同じく旧柳河藩領内に属するこの寺で売っていた玩具で幼い白秋も遊んでいたであろうことは想像の範囲である。ただし故郷と幼少期の様々なエピソードを綴った詩集『思ひ出』(明44・

6) には、何ら触れられてはいない。清水寺そのものに関して、後にエッセイ「四月の巡礼」(「令女界」昭4・4 『きよろる鶯』昭10・7収録)では、沖ノ端のゴンシヤン達が春になるとこの清水寺に巡礼に出かけたことが綴られているものの、『思ひ出』では寺の名前は伏せたまま、ただ菜の花畑の中に行く娘達の美しい姿が語られているだけだ。『思ひ出』編纂当時の白秋にとって、雉子車も清水寺もさほど強い思い入れと共に回想する対象ではなかったと言ふことだろう。おそらく白秋が雉子車を己の詩歌の題材として強く意識したのは、雉子車の短歌が発表された大正六年からそう隔たった時期ではないと思われる。大正五年五月、江口章子と再婚し葛飾に転居した彼はそこで紫煙草社を組織し、その機関誌「烟草の花」大正五年十二月号に次のような消息を載せた。

諸君に頼みがあるが、赤ん坊先生に諸君の国の素朴な玩具を送つてくれたまへ。金のかからぬ極々単純なのがよい。集めた上で草社で玩具祭をする。(「余白に」)

このせつ御歳暮に舍中の誰彼が玩具ばかり持つて来るので、母屋のお内儀さんが、ほんとに赤ん坊先生のやうだと毎日腹を抱えて笑つてゐる。(「葛飾から」)

白秋はこの時雉子車や清水寺に伝わる伝説を思い起こしたのではなからうか。あるいは草社の同人から送られた玩具の中に、雉子車が含まれていたのかもしれない。畑野栄三が記すように、この玩具は「うなるの友」第六編(芸艸

堂（大？）に彩色木版で紹介され、漸く一部好事家の知るところとなったと言う。

(三) 清水寺開基伝説

天台宗の古刹、本吉山清水寺は九州随一の三重塔を備え、今も福岡県瀬高町の山中に静かなたたずまいを見せている。春は桜、秋は紅葉が美しく、一带は公園として整備され地元の人々の憩いの場ともなっているが、福岡市内では知る人はさほど多くない。さて、境内に掲げられた縁起には大銅元年（八〇六）伝教大師（最澄）の開基と記され、白秋が「洗心雑話」に語る伝説が全て最澄に置き換えられている。また多くの観光案内書にも同様の記述が認められる。白秋の語る行其開基説は一般的な文献からは抹殺され、勿論井上薫編『行其事典』（国書刊行会 平9・7）別冊『行其ゆかりの寺』にも瀬高・清水寺の名は漏れている。この伝説的な奈良期の僧侶は日本各地に多くの言い伝えを残し、その始まりの詳らかではない寺院には行其開基と唱えるものも多い。もっとも最澄に関しても同様の伝説は多く、結論から言えば清水寺のそもそもの開基は不明である。

岡茂政『柳川史話』（青潮社 昭和59・9 初出「柳川新報」昭和55・12）によれば、さまざまな資料の中には伝教大師（最澄）御開基とするもの、また慈覚大師と記すものもあり、俗説として行其説が認められるとの事である。現在主流となっている最澄説は寛政五年柳河藩「寺院帳」や「諸国社寺縁起」中の「千手観音大士略縁起」に見える

そうだが、大同元年と言えば最澄ではなく空海が帰朝した年で、最澄には帰朝の徒次九州に立ち寄ったとの史実は伝わっていない。結局岡茂政は「筑後地鑑」の「何れの時代の建立なるかをしらず」と言う記述を「無理ならぬことである」と肯定するほかなかったのである。最澄説以上に疑わしい行其説であるが、渡辺村男『旧柳河藩誌』（福岡県柳川・山門・三池教育委員会 昭和32・3 原本は明治45・6）大正3・3（執筆）では伝教大師の開基と一旦は記しながら、「其本尊は香歎木の立木のまま其の根元にて行其菩薩一刀三礼して自ら千手観音を彫刻せし靈像なり」と、いつの間にか行基の話になってしまっている。行其菩薩御開基との〈俗説〉が深く広まっていた事の証左となるであろう。おそらく白秋は自らが故郷で大人たちから聞いたままに、行基と信じ書き記したものと思われる。

(四) 行基歌をめぐって

『玉葉和歌集』卷十九 釈教（正和元 1312年）に行基菩薩の作として次のような歌が採られている。

山鳥のなくをききて

山鳥のほろほると鳴く声聞けば父かと思ふ母かと思ふ

白秋が「おころり小山の雉子」に引いた歌の、初句と二句目が逆になった形である。勅撰集を尊重して、『玉葉和歌集』の形態を文献的には正確なものと見做すべきであろう。米山和子「行基歌へ山鳥のほろほろと鳴く声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」考」（『密教文化』平成7・1 『行其説話の生成と発展』勉誠社 平9・7収録）によれば、釈教の部に収録されたことから明らかなように、この歌は父母の転生を歌ったものである。「父かと思ふ母かと思ふ」というのは、山鳥の鳴く声を聞いて父母を偲んでいるのではなく、ほろほろと鳴いているあの山鳥はもしかしたら父母の後の世の姿かもしれないと、仏の説く転生の教えを詠んでいるのである。米山によれば様々な文献にこの歌は引かれ、時に輪廻転生の説話の中で語られると言う。以下に彼女の論文に引用された文献を年代順に整理して紹介する。

『万葉集時代雑事』（寿永2 1183年以前成立）

山鳥ノホロホロトナク音キケハ父カトソ思フ母カトソオモフ

『方丈記』（建歴2 1212年）

山鳥のほろと鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ

『行基菩薩講式』（嘉禎元〜正安3 1235〜1301年）

ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば父かと思ふ母かと思ふ

『夫木和歌抄』(延慶³頃 1310年)卷二十七の九動物部

山とりのほろほるとなくおときけばちちかと思ふははかと思ふ

『玉葉和歌集』卷十九釈教(正和元 1312年)

山鳥のほろほると鳴く声聞けば父かと思ふ母かと思ふ

『行基菩薩縁起図絵詞』(正和³ 1316年)

春^②野乃にほろほるとなくし尾 ちちかとおもふ母かとそ於もふ

『続鳩翁道話』(天保7 1836年)

山鳥のほろほると鳴く聲^アければ父かと思ふ母かと思ふ

下の句は表記を除いて異同は認められないが、上の句には様々なヴァリエーションが存在するようである。『行基菩薩講式』では「おころり小山の雉子」で白秋が引くように初句と二句が逆のバージョンが示され、『行基菩薩縁起図絵詞』にいたっては「やまどり」が「きし尾(雉子)」に変化している。しかし童謡「雉ぐるま」の注や「洗心雑話」に紹介された「ほろろうつ山の雉子の声きけば父かと思ふ母かと思ふ」は、米山論文にも、古典文学を専門としない私の調べ得た範囲にも発見できなかった。また明治以降の様々な文献では大方は「ほろほると」が初句に置かれた形態で、近代ではこちらを流布形とみなすべきであろう。伝えられる過程で、この印象的なオノマトペが冒頭へと

移るのは納得できるような気もする。『行基菩薩縁起図絵詞』の「きし尾」が若干気になり、あるいは白秋引用形を伝える文献が存在するのではとの疑いは残るものの、現時点では「ほろろうつ」は白秋の単純な記憶違い、もしくはケアレス・ミスと判断するほかはない。文献的な裏づけがあるのならば、後であっさり「ほろほると」という流布形に訂正することはなかったと考えられる。米山が論じているようにこの行其歌は高野山で詠んだとの説が流布しているが、「洗心雑話」の段階で彼にそのような通俗的な知識すらもなかったことは「この歌は果たしてこの清水の霊山で歌つたものであるか、それは私は知らぬ」とのくだりから明らかとなる。誰かから誤って教えられたまま記憶したのか、白秋が勝手に異文を産み出したのか、委細は不明だが信ずるにたる典拠に拠るものとは考えがたい。あるいは「おころり小山の雉子」に紹介されたわらべ歌とコンタミネーションを起こしたとも考えられる。

ねんねんよ、ころころよ。

ねんねん小山の雉子の子は、

何になるとてほろろうつ。

犬になるとてほろろうつ。

『お話・日本の童謡』に収録されたわらべ歌は白秋自らが採集したのではなく、明治四十二年九月、童謡研究会に

よって刊行された『諸国童謡大全』（春陽堂）から一部採ったと思われる。彼の伝承歌謡への関心は明治末期から現れており、童謡「雉ぐるま」制作の前からこのわらべ歌が記憶の何処かにあったとすれば、その注を付す際に行其の歌と混淆してしまったとも推測される。

ちなみに、柿本人麻呂の歌でも知られる山鳥はきじ科の日本特産種の鳥で、雉子によく似ているが尾が長い。白秋は「おころり小山の雉」で本来雉子の鳴声は「けんけん」で山鳥が「ほろろ」もしくは「ほろほろ」と解説するが、一般的な辞書類では「ほろろ」も「ほろほろ」も山鳥、もしくは雉子の鳴声とされ、「ほろろうつ」は雉子の羽ばたく様をあらわすという。岡本保孝「難波江」（江戸期 成立年未詳）では山鳥の歌を引いた後、「雉子と山鳥とは種類の物にてそのなく声は別にありて羽音のはたくとするをほろゝともほろくとも」詠んだと注釈されている。

（五）行基、芭蕉、そして藤村

父母のしきりに恋し雉子の声

前掲米山論文によれば本来釈教過歌の文脈で捉えられていた行其歌は、やがて単に父母を偲ぶ歌へと変質したと言う。その契機となったのが右の芭蕉の句であって、同時に山鳥の歌が高野山で詠まれたとの伝説も生まれた。『笈の

小文』(宝永6 1709年)、『枇杷園隨筆』(文化7 1810年)、『あらもの』(元禄元 1689年)に見えるこの句は、『枇杷園隨筆』では祖先の遺骨を納めた高野山に登り詠んだとされている。古典文学大系『芭蕉文集』(岩波書店 昭34・10)によれば、貞享五年、亡父の三十三回忌に際し帰郷した直後の作であり、『夫木抄』を出典として山鳥の歌を引き、「行其菩薩の高野山で作ったと伝えられる歌による」と注記されている。何故このような通説が誕生したかについては米山論文を参照願いたい。勿論白秋の一連の雉子車の童謡や短歌はこのような流れの中で、雉子と山鳥を同一視し、その鳴声に父母を思うという解釈に沿って生み出されたものである。様々な行基伝の中には、例えば大正五年九月刊行の殿水清円『行其菩薩』(仏教伝説叢書八巻 西村護法館)のように、山鳥の歌を行基が母の死に際して詠んだものと伝えるものもある。近代に入り、『玉葉和歌集』のように釈教の文脈で捉える解釈は影を潜め、芭蕉の句との混淆の中でもっぱら父母を思い偲ぶ歌とされたわけである。しかし白秋の場合、そのような近代的・一般的解釈からみずれた要素が見出される。童謡「雉ぐるま」は「お雉の背中に積むものは、／子雉、子々雉、孫の雉」と、「親雉子に小さな子雉子が負ぶさつたかはいい」(「洗心雑話」雉子車がうたわれているのだが、「雉は子の雉、父恋し」と、その子雉子が親を慕っているのである。「父恋し母恋してふ子の雉子は赤と青とに染められにけり」の場合はより明確に子雉子に焦点が当てられている。釈教歌として解釈するならば、鳴いている鳥は転生後の父母であった。しかし白秋の世界では子供が「父恋し、母恋し」と鳴いているわけである。一般に親子の情愛が深いとされる雉子であるが、「焼野の雉子、夜の鶴」という諺は親が子を思う愛情を意味している。

山が焼けるが、

起たぬか、雉子よ。

なんで起ちませう。子を置いて。

「おころり小山の雉子」でも右のような兵庫のわらべ歌に、「頬の紅いかはいい子の雉子を守るためには、山焼野焼の煙のなかにも巻きこまれて、けんけんと啼き立てる尾の長い雉子のお母さんのことを思つて御覧なさい」と解説してはいるが、白秋自身の作品においては、鳴いているのは子雉子の方なのである。冒頭部分に引いた「洗心雑話」でも、「雉子ぐるまを思ふと子供の時が忍ばれる。昼は遊びにまぎれてもゐるが、日が暮れかかると急に父母の恋しくなつた童の心が恋しくなる」と、父母を慕うと言うより、父母を慕っていた子供時代の自己を懐かしんでいる。「父恋し母恋してふ子の雉子」とは白秋自身なのである。自己を〈子〉の位相に置き、父母を慕う心を子供の本質と捉える白秋にとって、山鳥の歌を釈教の歌と捉える解釈は余りにも遠いし、芭蕉以降の父母を偲ぶ歌と捉えた場合でも特異な点が認められる。雉子の鳴声に喚起される思いは、次にあげる藤村の例がむしろ一般的と言えるであろう。

『ちゝはゝの／しきりにこひし／雉子の声』

岸本の胸に浮ぶは斯の句であつた。この短い言葉の蔭に隠されてある昔の人の漂泊の思ひもひどく彼の身に浸

みた。何時来るかも知れないやうな春を待侘び、身の行末を案じ煩ふやうな異郷の旅でもなければ、これほど父の愛を喚起す事もあるまいかと思はれた。

島崎藤村「新生」(一巻大正8・1 二巻大正8・12、連載大正7・5・1)同年10・5、大正8・1・27)同年10・23)の一卷百十四冒頭部である。姪との關係を逃れてフランスに旅立った主人公・岸本は非業の死を遂げた父を思う。この後百十九回までの七回分が父の回想に費やされ、その思いはやがて大作「夜明け前」(昭4・4)10・10)を生み出すこととなる。その契機となったのが芭蕉の句である。藤村が芭蕉を愛読したことはよく知られており、フランスへの逃避行に際しても芭蕉を数冊携えていったという。偶然に過ぎないではあるが、明治末から大正初めの藤村と白秋はよく似た軌跡をたどっている。白秋が隣家の人妻・松下俊子と知り合ったのが明治四十三年。この年藤村の妻は死去し、姪のこま子が藤村家に手伝いに来ることになった。大正二年には例の姦通事件、同じ年実は藤村にも密かなスキャンダルが進行していた。こま子の出産である。その時藤村は既にパリに逃れていたが、白秋もまた東京を離れ、三崎、小笠原と流浪する。性的な蹉跌と放浪、両者の生活と作品の大きな転換点となった事件は実は同じ頃の出来事だったのである。勿論、同じく海を渡ったとはいえ藤村のパリと白秋の小笠原は逃避行としてのスケールに大きな隔たりが存在するし、何よりも白秋の場合既に起こってしまったスキャンダルをどう受け止めるかの問題であったが、藤村の醜聞はまだ露見していない。そして大正七年、自ら「新生」を発表することで姪との關係を告白し

たわけである。しかし最大の相違は、〈山鳥―雉子〉をうたった〈歌―句〉を契機として〈親―子〉を思う時、藤村の父は既に死去しているが白秋の両親は健在であったという点である。芭蕉の句も父の三十三回忌に際して帰郷した際に詠まれたとされており、やはりこの句は亡き父母を偲ぶというコンテクストの中で人々の共感を得てきたであろう。実は「雉子ぐるま雉子は啼かねど日もすがら父母恋し雉子の尾ぐるま」の歌が収録された歌集『雀の卵』「雀の卵」〈雉子の尾〉の章は、年老いた父母の姿を描いた作品が集約されており、飯島耕^(注)一などは「白秋は何という深い親思いであろうか」と素直に感嘆し、「白秋は若い頃は別として、父にも母にもひとしく思いを注ぎ、二人をうたいつづけた」と記すが、父母の歌は大正五、六年発表作品にほぼ限定され〈雉子の尾〉は極めて特異な作品群なのである。斎藤茂吉の絶唱「死にたまふ母」の例を出すまでもなく、成人した子供が親に対する強い感情を喚起されるのはその死が重要な契機となる場合が殆どであろう。未だ健在な父母の淡々とした日常生活を一時期のみ執拗にうたう白秋が例外的なのである。「父母の恋しくなつた童の心が恋しくなる」という言葉に端的に示されるように、彼にとって重要なのは父母そのものというより、父母を慕う童の位相に自己を置くことではなからうか。

玉の緒の絶ゆる事無く童にて遊び惚れてむ親の御前に（初出 大6・3）

垂乳根の母にかしづき麻布やま詣でに來れば童のごと（初出不明）

〈雉子の尾〉には飯島耕一でなくともホロリとさせられるような、つつましい家族の日常や衰えた父母の姿、そして「いつまでか貧しき我ぞ三十路経て未だ泣かすかの生みの親を」(初出不明)と、成人した息子として父母に孝養を尽くせない自分自身への自責の念とともに、右のような親の前で子供に回帰する己の姿をうたった歌も認められるのである。そして雉子ぐるまの歌は「童のころ」との総題のもとに収録されていた。父そのものに対峙し、その人間としての存在を小説として追及しようとした藤村に対し、白秋の場合子供時代の父母との具体的な思い出が回想されるわけでもない。ただ父母の前で子供に回帰しようとしているのである。

(六) 石童丸とほろほろ鳥

何故白秋は自らを〈子〉の位相に置くことを必要としたのか。この問題については注1にあげた論文で考察を加えている。本稿では白秋そのものに直接的には関連しないが、どうしても言及しておきたいある疑問点を多少なりと解明しておきたいと思う。「贅注」ということで寛恕願いたい。

さて、「ほろほろと啼く山鳥の声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」という歌について、先ほど考察したように『玉葉和歌集』収録形の初句と二句目を転倒した形態が流布したのは、何より「ほろほろ」というオノマトペの訴求力によるものであろう。「ほろほろ」は涙の流れる様も表し、この語に切々とした情感と感傷的な響きを与えている。

ほろほろといえ、ホロホロ鳥（珠鳥 しゅけいとも呼ばれる）なる鳥が存在する。アフリカ原産のキジ科の鳥だが、いつ頃日本に渡来しどの程度飼育されてきたかについてはまだ調べ得ていない。その肉は美味の由であるが、ともかく現在でも食用としてそう普及はしていないようである。この鳥の存在を白秋は知っていた。

もの甘き風のまた生あたたかさ、

猥らなる獣らの囲内のあゆみ、

のろのろと枝に下がるなまけもの、あるは、貧しく

眼を据ゑて毛虫啄む嗟嘆のほろほろ鳥よ。

曇天の下の動物園をうたう『邪宗門』『曇日』（明42・3）の一節である。このほか童謡にもほろほろ鳥を題材としたものが見受けられる。^{（註）}しかし、白秋と同じく「赤い鳥」から童謡詩人として出発し、詩人、あるいは慶応大学教授として活躍しつつ流行歌の作詞家として数々のヒット曲を送り出した西條八十は、残念ながらほろほろ鳥の何たるかを知らないままあの名曲を作詞したらしい。

花も嵐も踏み越えて

北原白秋「雉ぐるま」贅注（國生）

行くが男の生きる途、

泣いてくれるな、ほろほろ鳥よ、

月の比叡を独り行く。

ご存知、松竹映画「愛染かつら」の主題歌「旅の夜風」である。発表は昭和十三年。「唄の自叙伝」（生活百科刊行会 昭和31 歌詞を含む引用は日本図書センター版 平成9・6）によれば、締め切りに追われた八十は苦し紛れに佐藤惣之助流にやっつけてしまおうと決意したそうである。佐藤はこの頃八十の名声を脅かすほどに注目され始めた作詞家で、しかも八十と同じように元はれっきとした詩人であった。佐藤の流儀は「意味を辿るとおおむね支離滅裂だが、要するに大衆の心を捉えそうな文句を、調子よく綴っていく」もので、彼はライバル心むき出しの酷評を下している。ともかくほろほろ鳥は次のような意図で造語したものであるという。

わたしが、「ほろほろ鳥」と書いたのは、ここへうらがなしい鳴音の鳥を点出したかったからで、わたしはいろいろ考えたあげく、比叡山にほど遠からぬ高野山を連想し、次いでそこに因みのある石童丸と刈萱道心の邂逅を想った。琵琶歌の「石童丸」の中にある「ほろほると鳴く山鳥の声聞けば、父かとおおもふ、母かとおおもふ」という古歌が胸に浮んだので、それを「ほろく鳥」という名に具体化したのだった。

「ほろほろ鳥」の出典も山鳥の歌だった。ただし、八十はそれを行基の和歌として認識していたわけではなく、琵琶歌「石童丸」の一節として記憶していたようだ。説教節「かるかや」を始めとして、謡曲や浄瑠璃に仕立てられた刈萱道心とその子・石童(堂)丸の物語は、明治に入っても琵琶歌として語り継がれていたのである。多くの薩摩人がいわば征服者として東京に乗り込んでくると同時に、彼らの様々な文化が移入された。薩摩琵琶もその一つで、生方敏郎も「薩摩琵琶や剣舞詩吟というものが、ことに学生の中に行われた」と回想するように、学生を中心とする男性層に浸透し、やがて筑前琵琶も東京進出を果たした。八十が学生時代を過ごした明治末期は学生間に盛んに琵琶会が催され、ジャーナリズムから批判を受けたことは倉田喜弘『明治大正の民衆娯楽』(岩波新書 昭55・3)の伝える通りである。薩摩、筑前の双方に石童丸の演目は存在するが、山鳥の和歌を取り入れたのは薩摩琵琶の方であった。作詞は四竈訥治なる人物。安政元年(1854年)に生まれ昭和三年に没した由であるが、詳しい履歴は伝わっていない。オルガン指南書など音楽関係の著書を残している。

九百九十の寺々や、峰谷々の阿弥陀仏、菩薩を念じ尋ねれど、父ぞと思ふ人はなく、三日二夜は早過ぬ、ふもとの母を案ずれば、後ろ引るゝ心地して、松吹風の音までも、母の声かとうたがはれ、

ほろ／＼と鳴山鳥の声きけば父かと思ふ母かと思ふ

と行其菩薩のよまれたる、歌の心も思はれて(下略)

出家した父が高野山に居るとのうわさを聞いた石童丸は、女人禁制ゆえ母を籠のかむろ宿に残し一人高野に入る。

この後刈萱道心と石童丸の親子の名乗りをあげ得ない哀しい再会。最も感傷的な場面の前に山鳥の歌は効果的に置かれていた。勿論、高野山で詠まれたとの伝説を踏まえ、釈教の歌ではなく父母を恋い慕う歌としての解釈にそったものである。引用は吉水錦翁『精神教育帝國琵琶／練磨集卷二』(錦水会 明治38・9)に拠ったが、この演目の成立年代は不明である。少なくとも四竈訥治編『薩摩琵琶歌』(三三文房 第一篇明24・11、第二編明25・3)には未収録であった。明治二十年代後半から三十年代にかけての成立としておく他あるまい。説教節、謡曲、浄瑠璃、読本等に仕立てられ、現在までに活字本で刊行されている石童丸説話(注6)を閲しても、山鳥の歌を取り入れたテキストは見当たらない。しかしこの物語は歌祭文、口説、和賛、絵解きといった口承の世界で語り伝えられており、様々な異文が生じていたと考えられる。(注7)それらの中に山鳥の歌を取り入れたテキストが既に存在していたのか、それとも作者の創案によるものかは解明しがたいが、ともかくこの琵琶歌は広範な影響を様々なジャンルに及ぼしたと考えられる。(五)

で紹介した大正五年刊行殿水清円『行其菩薩』は山鳥の歌を母の死に際して詠んだと伝えているが、その部分の記述が明らかに琵琶歌「石童丸」を下敷きにしている。

常々御感ありしかば、寔に亡き御父母に、引かせ給ふ心地して、松吹く風の音迄も、母の声かと疑はれ、遂に其の熱情止み難く、或時一首を詠じ給ふに

ほろ／＼と鳴く山鳥の声きけば／父かと思ふ母かと思ふ

とあり、歌の心こそ最も哀に想ひやられける、

行基の歌を効果的に配した琵琶歌が行基伝の表現に影響を及ぼすというのは、本末転倒ともいえるがまことに興味深い。さらに琵琶歌の影響は近代の新たな口承芸能の世界にも及んでいたようなのである。西沢爽『日本近代歌謡史 下』（桜楓社 平成2・11）によれば、明治末期様々な演歌師達がこの演目を取り入れたという。数多い琵琶歌の中でも演歌となったのは「石童丸」が唯一とのことで、同書には次のような歌詞も引かれている。

啼く山鳥の声聞けば 父の声かと目を醒まし

松吹く風の音だにも 父の声かと思はれつ

諸行無常を告げ渡る 鐘の音いとゞ身に沁みて

大空高く澄む月も 物の哀れを添ゑにけり

葉村小華作「孝子血涙石童丸」（「血涙集」 「東京青年倶楽部」明治42・10）

絵解き、和賛等の中世以降の口承芸能の世界に語り継がれてきた石童丸と刈萱道心の物語は、琵琶歌を経てレコー

ドという複製技術が未発達な時代に大道に出て民衆の耳に直接歌を伝える演歌師達に継承されていたのである。数多い石童丸演歌のその全てに山鳥の歌が盛り込まれているわけではないが、このような展開を見ると、芭蕉も浄瑠璃も知らない近代の民衆層にまで、山鳥の歌が父母恋いの哀切な歌として浸透していたのではないかと思われる。親子の生き別れは民衆の感傷に最も訴えるテーマであろう。そのテーマとともに山鳥や「ほろほろ」というオノマトペが人々の感受性の中に密かに浸透していたのではなからうか。八十の「旅の夜風」は親子の生き別れではないが、男女の愛と別れと再会への希求、そして流浪がうたわれており、親子と男女を入れ替えた形で類似したテーマが展開されている。さらに女性の立場から歌う二番には「優しかの君、ただ独り、／発たせまつりし旅の空、／可愛い子供は女の生命／なぜに淋しい子守唄」と、親子の別れさえもサブテーマとして潜在しているのである。「ほろほろ鳥」は「でたらめ」な造語であったとしても、永く深く広く大衆の嗜好に訴えるフレーズを創造しえた八十は、それと自覚しないまま中世以降連綿と連なる芸能の伝統のうちに自らを組み入れたと言えるのではなからうか。もっとも、比叡山から「ほど遠からぬ」ということで高野山を連想するあたりは、かなり乱暴と言わざるを得ないが。

さて、山鳥の歌を最初「ほろろうつ」と紹介した白秋は、「石童丸」の琵琶歌もそれをもとにした演歌も知らなかったということになる。 「雉子ぐるま雉子は啼かねど」の歌が雑誌に発表された際には、「玩具の雉」という題の後にただ「筑後清水寺。開山行基菩薩」と注記されていたのだが、行基の歌と親子愛というテーマがこれほど広く浸透していたとすれば、「父母恋し」の部分と響きあい、山鳥の歌を思い浮かべる読者は現在想像する以上に多かつ

たのではなからうか。つまり、わらべ歌を基盤とした創作童謡の出発点に位置する「雉子ぐるま」は、実は民衆による口承の世界に連なる要素を孕んでいたのである。わらべ歌を含む民謡を「自然の発露」「人間本来の声と姿とによつて真実を見出さんと欲した^(注)」ものとして高く評価した白秋にとって、それは望外の幸福ではなからうか。

注

- 1 「詩集『思ひ出』その後―神話と制度―」（「日本現代詩歌研究」3 平10・3）。『雀の卵』断片―父母と妻をめぐって―（『近代文学論集』28 平14・11）。『雲母集』と『雀の卵』の間に―大正二、三年期の北原白秋―（『福岡大学人文論叢』35―2 平15・9）。
- 2 注1に同じ。
- 3 飯島耕一『白秋と茂吉』（みすず書房 平15・10）。なお、同書は『北原白秋ノート』（小沢書店 昭53・4）の新装版である。
- 4 童謡「羽音」（『祭りの笛』大11・6）、童謡「ほろほろ鳥」（『七つの胡桃』昭17・11）。また、『思ひ出』の序文「我が生ひたち」には「黄色い陰鬱な光のもとにまだ見も知らぬ寂しい鳥がほろほると鳴き」といった表現も認められる。
- 5 『明治大正見聞記』（春秋社 大15・11）。引用は中公文庫版（昭53・10）による。
- 6 ●説教「かるかや」（寛永8 1631年）【新日本古典文学大系『古浄瑠璃説教集』・岩波書店 平11・12】。●謡曲「刈萱」【『謡曲評釈』・博文館 明44・9】。●「刈萱道心行状記」（寛延2 1749年）【続帝国文庫「高僧実伝仏教各宗統」博文館 明36】。●八文字屋本「刈萱二面鏡」（享保2 1742年）【『八文字屋本全集』一六卷・汲古書院 平10・1】。

●浄瑠璃「刈萱桑門筑紫轡」(享保20 1735年) 【『浄瑠璃名作集』上 有朋堂書店 大15】。●滝沢馬琴「石堂丸刈萱物語」(文化3 1806) 【駁々堂 明21・6】。

7 近代に入っても刈萱石堂丸の物語は様々な文献に残されている。非文献資料も含めたそれらの調査結果はいずれ明らかにしたい。

8 「俗謡の新味」(「国民文学」 大4・4)。